

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 28 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370660

研究課題名(和文) 日本におけるインドネシア語教材の分析と教材バンクの創設

研究課題名(英文) Analysis of Indonesian Teaching Materials and Creating the Materials Bank in Japan

## 研究代表者

森山 幹弘 (Moriyama, Mikihiro)

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：50298494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：文法の基本教材は、国内外の主要な文法書を主に参照し、その成果を還元する形で教育用に記述した。すなわち、研究文法ではなく、学習者が慣れている英語や日本語の教育文法の用語や概念との対応などを考慮した、初級から中・上級までを網羅した教育文法を記述した。発音・文字は、文法と語彙から独立性が高い教材であるが、この分野ではアクセント、イントネーションの記述が含まれるため、形態論や統語論との関連性を考慮して記述した。また、インドネシア語と日本語の音韻構造の違いをふまえ、日本語話者にとって問題点を認識させるような教材とした。本年度未までに、基本文法の記述をほぼ完成させることができた。

研究成果の概要(英文)：A description of basic materials of Indonesian grammar has been completed by the end of this year. The description was made on the basis of existed materials of Indonesian grammar written by both domestic and overseas researchers and teachers. Both English and Japanese grammatical terminology and reference were used in terms of description of grammar so that general learners in Japan easily understand the description. The level of description covers from the beginners to advanced learners. The description of pronunciation and spelling was made in relation with morphology and syntax because it includes elements of accent and intonation though they are rather independent materials from grammar and vocabulary. Special consideration for Japanese learners was made in terms of pronunciation because of the difference of phonemic structure between Indonesian and Japanese.

研究分野：社会言語学

キーワード：言語学 外国語教育 インドネシア語 教材研究

## 1. 研究開始当初の背景

1998年のインドネシア社会の混乱以後、世界的にインドネシア研究は後退を経験している。日本においても大学を中心とする教育機関などでインドネシア語を学ぶ学生の数が減少してきた。学習者が多かった時代においてはそれぞれの教育機関で学習者に合わせた教材を開発し、教授法を研究して教える努力が行われてきたが、この10年間においては学習者が減少し、これまで教えられていた教育機関でインドネシア語が教えられなくなってくるにつれ、それらの教育機関に所属する教員も減少しているため、限られた教員だけでは独自の教材を開発し、教育する「体力」がなくなっている。現在、日本の大学においてはインドネシア語を専攻語として学ぶ学生と、教養教育の一部として教えられてきた様々な外国語科目(第二もしくは第三の外国語と呼ばれた)の一つとしてインドネシア語を学ぶ学生がいる。その両方において学習者が減少しており、いくつかの大学ではインドネシア語の授業が閉鎖されたり、学科の改変を余儀なくされている。このような現状を踏まえ、日本のインドネシア語教育の活性化のために、インドネシア語教育関係者と研究者が取り組まなければならない問題は、インドネシア語の教材整備の遅れである。それは、(1)初級教材のばらつき(2)中・上級教材の開発の遅れ(3)会話教材の不整備、を挙げることができる。

(1) 初級教材のばらつき 初級レベルの教育は、当然どの大学でも行われている。いわゆる教科書やテキストとして、担当教員が作成するハンドアウトのものや、一般向けの市販のものが用いられることもある。初級レベルの教科書や学習テキストにおいて設定されている「教える/学ぶ内容項目」およびそれがどのような解釈や用語で記述されているかを見ると、きわめて統一性を欠いている。現状のインドネシア語教育に鑑みると、日本

の大学レベルのインドネシア語教育全体で用いる規範的なモデルが作られるのが望ましい。実情を見る限り、インドネシア語専攻のような体系的なインドネシア語教育がなされるべき教育機関においては、1つの機関内においてさえ統一的ではなく、そのような規範的なモデルの重要性と必要性を教員が常々感じながらも、その教材開発が実現できない状態である。

(2) 中・上級教材の開発の遅れ 基本的な文法項目が教えられる初級レベルの後、中・上級レベルでは、「教える/学ぶ時に用いる教科書等」が用意されることなく、「生きたインドネシア語」(ニュース、小説など)をそのまま用い、「教える/学ぶ内容項目」が設定されないままで教育が行われているのが現状である。中・上級レベルでは、ニュース記事などを直接使用することは可能であるが、教師と学生の両方にとって、何がタスクなのか、何が目標であるのかが不明なまま生の「教材」を使って教育が行われていることがある。「教える/学ぶ内容項目」が示され、「教える/学ぶ時に用いる教科書等」を作成する必要がある。

(3) 会話教材の不整備 会話教材は初級、中・上級レベルのいずれにもかかわる問題を抱えている。たとえばインドネシア語を専攻語とする専門的な教育では、「文法」「読解」「作文」「会話」など、それぞれに焦点を当てた授業を設けているが、「会話」は大抵ネイティブ教員が担当し、テキストの使用や内容は内容が調整されないまま教えられていることが多い。「文法」「読解」「作文」などの会話以外の授業とのリンクはほとんど考えられていないのが現状である。

このような状況をふまえ、「教える/学ぶ内容項目」と「教える/学ぶ時に用いる教科書等」について、統一的・規範的なものを作成することが必要であり、それは将来のインドネシア語教育の発展に有効であると考え

た。それぞれの教育機関で一から作るのではなく、国内にプロジェクトチーム、今回は国内の3つの教育機関の3名の研究者によってチームを形成しそのような教材を開発することは非常に有益であると考えた。それによって、それぞれの教育機関の教員・研究者は教材の改訂・発展させることに時間と知恵を使うことができるからである。また、この試みによって、日本のインドネシア語教育を個別にではなく、関係者全体で検討することで、問題や課題を共有することにつながる。

## 2. 研究の目的

インドネシア語教育の教材の開発も停滞を止むなくされている状況において、既存の教育資源を最大限に有効活用し、国内の教育機関で利用できる教材の開発を国内のインドネシア語教育の現場で携わる教育者・研究者が協力して行うことが必要である。本研究においては、日本のインドネシア語教育の中心的な役割を担ってきた教育機関の研究者が協力し、インドネシア語教材の問題を分析した上で、国内の教育機関で共同で利用できる共通教材を開発し、教材バンクを作成することが目的である。本研究ではこのような現状認識から出発し、(1)上記のような認識が正しいかどうかの検討を行うこと(2)改善すべき問題点を踏まえて、日本におけるインドネシア語教材の共通教材を作成すること、という二つの目的を持っている。

## 3. 研究の方法

本研究では日本において長年、インドネシア語教育の中心的な役割を果たしてきた東京外国語大学、大阪大学(旧大阪外国語大学)が行ってきたインドネシア語教育を中心に、教材、教授法の評価を行い、さらには日本で最も学習者が多い南山大学のアジア学科で行われているインドネシア語教育で使われている教材と教授法の評価を加味した上で、現状を分析した。その上で、明らか

になった問題点を踏まえて、必要とされる将来のインドネシア語教育のための共通教材について、3名の研究者が共同で研究を実施した。その研究成果に基づき、実際に利用できる共通教材の開発を同時並行的に行った。そのような方法をとるのは教材の研究を行うことと実際に使われる教材を切り離して議論することはできないと考えるからである。以下は具体的な研究方法である。

(1) 既存のインドネシア語教材の分析を行うことが第一ステップとなる。そのために3名の研究者が手分けして国内の教育機関および市販されている教材の収集を行うとともに、インドネシア語教育の蓄積のある国外の教材も収集し、それらを比較検討した。次に、その検討を踏まえ研究を行いながら基本教材と応用教材の開発を行った。さらに、インドネシア語の素材の収集を行い、データを整理した。新教材の案と言語素材をもとに、日本の教育機関で共通に使用できる共通教材を編集し、日本のインドネシア語教育に携わる者が利用できる教材バンクとする文法記述を行った。それぞれのステップは、3名の研究者が密な議論を行い、進めて行った。

(2) インドネシア語教材、「基本教材」と「応用教材」の開発。本研究で扱う教材を開発するために「基本教材」と「応用教材」に分けて考えた。「基本教材」は、言語習得にとって基本的な知識となる文法、語彙、発音・文字の各分野における「教える/学ぶ内容項目」とそれを記述した「教える/学ぶ時に用いる教科書等」である。この基本3分野それぞれにおいて、何を、どのような枠組み(解釈)で教えるべきかを、1つの規範的モデルとして考えて教材の開発を進めていった。一方、「教える/学ぶ時に用いる教科書等」は、各教育機関のレベルや事情に合わせて教授習得項目を取捨選択したもので、それらの教科書を収集し分析を行い、活用できるものを取り込んでいった。次に、「応用教材」につ

いての研究を行った。応用教材は、「基本教材」の内容に基づいた言語の運用に必須な技能とされる「読む、書く、聞く、話す」4種類の能力を向上させるための教科書や練習問題であり、基本教材とは逆に、「教える／学ぶ時に用いる教科書等」に重点が置かれているものである。これらについても既存の教材を収集し、整理し、分析を行い、共通教材のための資料作りを行った。

#### 4. 研究成果

上述の日本のインドネシア語教育の現状をふまえ、申請者らは次の2つの特徴をもつ教材開発を開始した。まず、学生が直接使うのではなく、教員が参照する教材であり、それを日本のインドネシア語教員が共有し利用できる教材バンクとすることである。そして、教材バンクは、大学における初級から上級までの教授内容を網羅し、どのような枠組み（解釈）で教えるべきかを、日本のインドネシア語教育の1つの「規範的モデル」として提示し、その中から教員が学生のレベル、授業の内容や目的に合わせて必要な項目を選び、各自がカスタマイズして利用するということがある。

教材は、言語習得にとって基本的な知識となる文法、語彙、音声・表記の「基本教材」と、それらの知識をもとにした長文読解、会話、作文などの練習を中心とした「応用教材」とからなるが、本研究においてはまず「基本教材」の開発を優先課題として取り組み、その記述を完成させた。文法の基本教材は、国内外の主要な文法書を主に参照し、その成果を還元する形で教育用に記述した。すなわち、研究文法ではなく、学習者が慣れている英語や日本語の教育文法の用語や概念との対応などを考慮した、初級から中・上級までを網羅した教育文法を記述した。語彙の基本教材については、頻度、分野、文化的な特殊性、日本との違いなどの観点から単語を選出し、

目標語彙リストを作成した。それは、既存の語彙集や語彙の頻度に関する研究などをもとに、各段階500語の計4段階からなる具体的な目標を示した語彙教材である。また、文法の基本教材で見られる語彙とのリンクも考慮したものになっている。発音・文字は、文法と語彙から独立性が高い教材であるが、この分野ではアクセント、イントネーションの記述が含まれるため、形態論や統語論（ここでは語彙、文法の分野に相当する）との関連性を考慮した。また、インドネシア語と日本語の音韻構造の違いをふまえ、日本語話者にとって問題点を認識させるような教材とした。このように、基本教材を構成する3分野は相互にリンクしており、また、日本語話者がインドネシア語を学ぶ際の問題点をふまえたものとなっている。この基本教材の試作版は完成しており、これをウェブページにアップし、日本の大学におけるインドネシア語教員がダウンロードして利用できる教材バンク基礎編の開設を行う予定である。今後は、国内のインドネシア語教育機関の現場で教えている教員・研究者に試用してもらい、フィードバックを受ける。

応用教材については、資料の収集を完了し、その分析と議論を行ったが、今回の研究ではその記述までは至らなかった。継続して実施を計画している第二次の研究計画において進めていく計画である。基本教材と同様に、日本インドネシア学会の協力を仰ぎながら調整を行い、必要とする教育者に提供できるよう、「応用教材バンク」を創設することを目指す。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 10件)

森山幹弘, 「インドネシア語のリンガフランカとして役割の変遷」『ことばと社会』17号, 三元社, pp. 30-50. 2015年、査読あり。

原真由子, 「バリ語山地方言における人称詞と呼称に見られる敬語使用」、『インド

ネシア言語と文化』、21号、1-11、2015年、査読なし。

Moriyama, Mikihiro, 'Bahasa Sunda dalam berdoa' [Sundanese in pray], in Julian Millie and Dede Syarif eds., *Islam dan Regionalisma* [Islam and Regionalism], Bandung: PT Dunia Pustaka Jaya, pp. 107-116. 2015. 査読あり。

Moriyama, Mikihiro, 'Poet in an Islamic Community: Cultural and Social Activities of Acep Zamzam Noor in Tasikmalaya, West Java', *Studia Islamika, Indonesian Journal for Islamic Studies*, Vol. 22, No. 2, pp. 269-295. 2015. 査読あり。

森山幹弘、サフィトリ・エリアス、モハンマド・ウマル・ムスリム、降幡正志、原真由子、「インドネシア語会話の授業について」『インドネシア言語と文化』、20号、1-11、2014年、査読なし。

降幡正志、「インドネシア語名詞文の超分節特性に関する考察」、『東京外大東南アジア学』、19号、86-101、2014年、査読なし。

Moriyama, Mikihiro, Greg Barton, Linda Hinasah and Julian Millie, "Post-authoritarian diversity in Indonesia's state-owned mosques: A *manakiban* case study", *Journal of Southeast Asian Studies*, Vol. 45, No. 2, 194-213, 2014, 査読あり。

Moriyama, Mikihiro, "A Comparison of Character Education between Sundanese Region in Indonesia and Japan", *Character Education in the Sundanese and Japanese Cultures: A Comparative Study* (Ruhaliah ed), Universitas Pendidikan Indonesia, 126 - 140, 2014年、査読なし。

降幡正志、「インドネシア語教育における言語規範」、『外国語教育研究』、16号、147-155、2013年、査読なし。

降幡正志、「インドネシア語の所有・存在表現」、『語学研究所論集』、18号、308-331、2013年、査読なし。

[学会発表](計 7件)

Furihata, Masashi. "Praktek Pengajaran Pelafalan Bahasa Indonesia terhadap Penutur Bahasa Jepang (「日本語話者へのインドネシア語の発音の教授法」)", Seminar Internasional "Tantangan Bahasa dan Sastra Indonesia/Melayu pada Era Masyarakat Ekonomi ASEAN (MEA). Jurusan Sastra Indonesia, Fakultas Ilmu Budaya, Universitas Gadjah Mada (国際シンポジウム「ASEAN 時代におけるインドネシア・マレーの言語と文学の挑戦」インドネシア共和国、ガジャマダ大学)、2015

年 8月 18~19日。

Furihata, Masashi. "Particles *teh* and *mah* as Topic Markers in Sundanese", The Fifth International Symposium On The Languages Of Java (Isløj5). Universitas Pendidikan Indonesia, Bandung, West Java, Indonesia. 6-7 June 2015.

原真由子「バリ語とインドネシア語コード混在会話におけるバリ語の particle が果たす機能」日本インドネシア学会第46回研究大会、京都外国語専門学校、2015年 11月 14日。

Moriyama, Mikihiro, 'Indonesian Literature and Regionalism: Ajip Rosidi's *Anak Tanahair*', International Conference '70 Years of Textual Production in Indonesia: Cultural Traditions Informing Modern Productions', Goethe University of Frankfurt, ドイツ連邦, 12-13 October 2015.

森山幹弘、「多言語社会インドネシア 植民地時代から現在への道のり」、『第8回多言語社会研究会・研究大会基調講演、名古屋市立大学、2014年 12月 6日。

降幡正志、森山幹弘、原真由子、「インドネシア語文法共通基本教材の作成への取り組み」、『外国語教育学会第18回研究報告大会、東京外国語大学、2014年 11月 1日。

森山幹弘、サフィトリ・エリアス、モハンマド・ウマル・ムスリム、降幡正志、原真由子、「インドネシア語の会話の授業について ネイティブ教員の報告を手がかりとして」、『日本インドネシア学会第44回大会テーマ発表、摂南大学、2013年 11月 9日。

[図書](計 2件)

降幡正志、『インドネシア語のしくみ《新版》』、白水社、146頁、2014年。

原真由子、『ニューエクスプレスインドネシア語単語集』、白水社、250頁、2013年。

[その他]

ホームページ等

現在、作成中。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森山 幹弘 (MORIYAMA, Mikihiro)

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：50298494

### (2) 研究分担者

原 真由子 (HARA, Mayuko)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：20389563

降幡 正志 (FURIHATA, Masashi)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研  
院・准教授  
研究者番号： 40323729